済生会だより ならしの

千葉県済生会習志野病院 院外広報誌

No.23 2012.夏号

Contents

- リウマチ膠原病センターの紹介
- 第7回 医療連携フォーラム開催報告
- 糖尿病講座のご案内

今号の表紙

当院の病後児保育
「キッズケアルームなでしこ」の
スタッフの作品です。

いのちに寄り添い100年

病院の理念

患者さんの権利を尊重し、共に考える良質な医療の提供、すなわち患者さん指向の医療をめざし、もって地域住民の健康と福祉の増進に努めます。

病院の基本方針

- 職員が誇りを持ち、患者さんが満足・安心できる効率的な医療の提供に努めます。
- すべての診療情報を患者さんにお伝えします。
- 信頼される医療を行うために研修、研鑽をいたします。
- 地域の医療機関との連携のもとに中核病院としての役割を果たします。

リウマチ膠原病センターの紹介（リウマチ膠原病アレルギー科）

センター長・副院長　縄田泰史

（後列左から松本・渡邊・縄田・高橋・濱里）

2001年の開院以来「リウマチ膠原病アレルギー科」の名称で診療してきましたが、診療の大部分が「関節リウマチ」「膠原病」などのリウマチ性疾患であることから、2009年に「リウマチ膠原病センター」として再出発しています。

2012年4月には常勤の専門医が5名（縄田泰史、渡邊紀彦、高橋成和、松本弘俊、濱里一裕）に増えて、リウマチ膠原病診療に関しては千葉県下でもトップクラスの陣容になっています。今後さらに診療を充実し発展させていきたいとスタッフ一同（研修医・ナースとともに）がんばっていますのでよろしくお願い致します。

外来通院患者数は近隣に専門診療が可能な施設が少なかったこともあり、開院以来年々増加の一途で、現在は約2,500人の関節リウマチ/膠原病の患者さんを診療しています。特に関節リウマチは治療の進歩とともに早期からの専門的診療が必要なことが明らかにされ、膠原病の鑑別診断を含めて早期に紹介受診される方が増えています。また、検査で抗核抗体陽性などで膠原病を疑われ紹介される方も多く、さまざまなリウマチ性疾患を診療しています。一方、入院患者数は年間230人ですが、そのほとんどが膠原病の方です。従来、他院からの診療依頼に十分答えられていない点もありましたが、医師が増えて受け入れやすくなりました。

また、当院は人工関節置換術等をおこなう「関節外科センター」も併設しており、内科・整形外科が連携して関節リウマチを診療できる全国でも数少ない施設の一つであり、リウマチ学会専門医認定教育施設になっています。（アレルギー学会専門医教育施設にも認定）

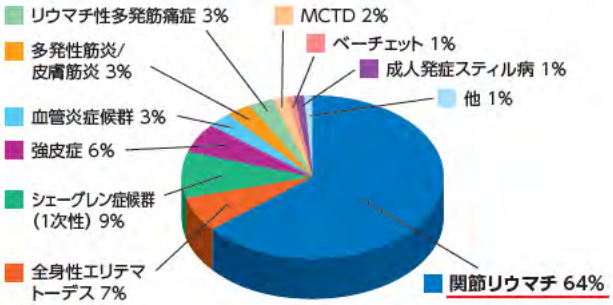
関節リウマチの治療は、近年、生物学的製剤（最新のバイオテクノロジー技術を駆使して開発された新しい薬で、生物が産生した蛋白質を利用して作られています。）の出現とともに画期的に変貌し、これまで困難であった「寛解」（ほぼ治ったに等しい状態）を目指す時代になっています。日本では現在6種類の生物学的製剤が使用できますが、当センターでも現在約200名の方が使われています。有効で寛解となる方も多いのですが価格が高いことが欠点です。また、免疫を抑える作用から感染症（肺炎など）に注意が必要ですが、その予防や治療には膠原病専門医として培ってきたノウハウが非常に役立っています。

一方、新規薬剤発売前の臨床試験（治験）にも積極的に取り組んでいます。関節リウマチ・全身性エリテマトーデスを対象に多くの治験をおこなってきており、専門スタッフとともに注意深く診療をおこなっています。新薬の評価は診療レベルの向上にも役立つと考えていますのでご協力頂ければ幸いです。

今後、膠原病・関節リウマチ領域において、最新の知見にもとづく質の高い医療、個々の患者さんに適切で信頼される医療を目指して、充実させていきたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

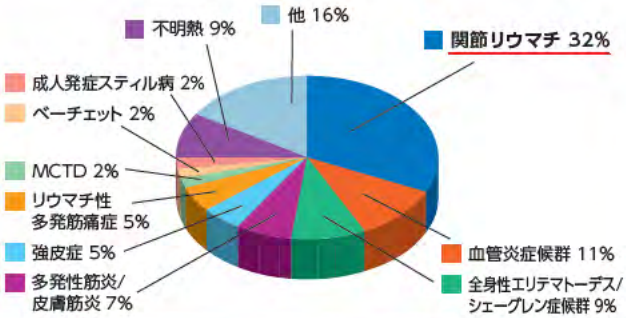
2011年度 外来通院患者数…2,500

関節リウマチ…1500、全身性エリテマトーデス…170、シェーグレン症候群（1次性）…200、強皮症…150、血管炎…80、多発性筋炎/皮膚筋炎…70、リウマチ性多発筋痛症…70、MCTD…35、ベーチェット病…35、成人発症スティル病…15、ほか



2011年度 入院患者数…230

関節リウマチ…70、血管炎…23、全身性エリテマトーデス/シェーグレン症候群…20、多発性筋炎/皮膚筋炎…16、強皮症…12、リウマチ性多発筋痛症…10、MCTD…5、ベーチェット病…5、成人発症スティル病…5、不明熱…20、ほか



膠原病とは

医長　渡邊　紀彦

膠原病とは結合組織や血管、関節に病変がおこり、発病に免疫異常（自分の組織に対する免疫反応）が関与する全身性の病気の総称です。多くのものが慢性の経過をたどります。

膠原病に含まれる病気には
関節リウマチ　全身性エリテマトーデス　強皮症　多発性筋炎・皮膚筋炎　シェーグレン症候群　混合性結合組織病　結節性多発動脈炎　ウェゲナー肉芽腫症　アレルギー性肉芽腫性血管炎　大動脈炎症候群　側頭動脈炎　リウマチ熱　リウマチ性多発筋痛症　ベーチェット病などがあります。

膠原病に含まれる病気にはいくつかの共通性があり、以下のような特徴がみられます。

(1) 症状として発熱、疲れやすい、関節痛、筋肉痛、こわばりなどがみられ、これらは全身性の炎症によって生じます。
(2) 全身の結合組織が侵され多数の臓器が障害されます。
(3) 免疫の異常がみられます。自己の成分に対して異常な免疫反応が生じており、これは自己免疫と呼ばれています。すなわち膠原病は臨床的にはリウマチ性疾患、病理組織学的には結合組織疾患、免疫学的には自己免疫疾患にそれぞれ分類されます。
(4) かかりやすい体質は受け継がれることがありますが、はっきりとした遺伝性はありません。
(5) 他の人にうつる伝染病ではありません。
(6) 悪性腫瘍（がん）ではありません。

膠原病の治療法は疾患ごとに異なりますが、病気のなりたちから、免疫を抑える薬（ステロイド・免疫抑制剤）、原因になる物質や細胞を抑える薬（生物学的製剤）、炎症や痛みを取る薬（消炎鎮痛剤）などで治療します。治療方法は年々進歩しており、今ではほとんどの人が疾患とつき合いながら通常の生活を送れるようになっています。当科では詳しい診察や検査をおこない、患者さんごとに最適な治療を選択していきます。

一口メモ　膠原病の名前の由来は、膠原線維という結合組織の成分から来ています。結合組織は細胞同士を結びつけて、臓器の強度を保つ役割を持っています。膠原線維というと聞き慣れない言葉ですが、これは美容の面でおなじみの言葉、コラーゲンのことです。約70年前にアメリカの病理学者が、膠原線維が変性してできる物質が組織にみつかる病気をまとめて膠原病（Collagen Disesase）と呼ぶことを提唱したことが始まりです。

関節リウマチとは

医師　高橋　成和

関節リウマチは全身の多くの関節に炎症がおこり、関節に腫れや痛みをおこす病気です。長期間にわたって進行すると関節が破壊されて変形し、機能障害をおこしてきます。以前は有効な治療法もあまりなく、治療も弱いものから始め、効かなければ徐々に強くしていくといったやり方がされていたため、病気の勢いが抑えきれず関節の破壊が進行し、寝たきりになってしまうことも少なくありませんでした。

近年、関節の破壊は関節リウマチが発病してから早期（特に1～2年以内）が一番病状が進むということが分かってきました。そこで診断がついたら、すみやかにしっかりとした強い治療をおこなうことで症状をコントロールし、関節破壊を防いでいこうというのが、最近の治療の方法です。

もし関節の朝のこわばりや痛み、腫れといった関節リウマチを疑う症状が出た時は、まずはしっかりとした早期診断が必要です。最近新しい診断基準が出たことにより、早期診断が可能になりました。抗CCP抗体といった血液のマーカーや関節MRI・関節超音波といった画像診断の進歩により、診断率の大幅な向上を見込めるようになり、また他の疾患との鑑別もつけやすくなっているため、病院できちんと診断してもらう事から始まります。

診断がついたらすみやかに治療に入ります。関節リウマチの治療の目標は、現在ある関節の痛みや腫れを抑えること、関節が破壊されないようにすること、そして将来的にも身体機能を維持することです。主な治療法は薬物療法・外科的治療（手術）・理学療法ですが、治療の中心は抗リウマチ薬と呼ばれる薬物を中心とした薬物療法です。また最近は関節リウマチの炎症を引きおこしているサイトカインと呼ばれる物質を特異的に抑える、いわゆる「生物学的製剤」により、リウマチ治療は革新的な進歩をとげました。生物学的製剤は極めて高い有効率を認めるのみならず、強い関節破壊抑制効果があり、「寛解」を目指せるようになりました。当科ではすでに多数の症例に生物学的製剤を使用しておりますが、感染症等の副作用もあり、それらに十分注意しながら診療にあたっています。また関節の炎症を引きおこしている白血球を取り除く「白血球除去療法（LCAP）といった治療や新規薬剤発売前の臨床試験（治験）もおこなっており、個々の患者さんに合わせて、治療法を決めていきます。

一口メモ　関節リウマチの「リウマ」はギリシャ語で「流れる」を意味します。昔は悪い液が頭から体の方へ流れ出し、痛みとこわばりをおこすと考えられていました。はるか昔からあった病気ですが、最近になるまで良い治療法がなく、多くの患者さんは痛みや変形と戦い続けていました。フランスの印象派の画家である「ルノワール」が人生後半30年間を、関節リウマチとの戦いに明け暮れ、筆を手にくくりつけながら絵を描いていたことはあまりにも有名です。

＊ リウマチ膠原病アレルギー科は完全予約制です。（電話での予約可能。）初診には紹介状が必要です。

第7回 医療連携フォーラムを開催しました

平成24年5月23日(水)19:30より8階講堂にてフォーラムを開催いたしました。当日は沢山のご参加を頂きました。多くの医療機関の方々をはじめ、ご出席いただき誠にありがとうございました。

フォーラムは呼吸器科黒田文伸医長から呼吸器科の状況と医師の紹介、続いて講演として篠原昌夫、露崎淳一より「呼吸器疾患の話(1)睡眠時無呼吸症候群、COPDについて」と黒田文伸医長より「呼吸器疾患の話(2)呼吸器科、肺癌について」について講演させていただきました。

講演に続き当院8階レストランにて情報交換会を行いました。ご出席の先生方と当院医師が直接お会いする事ができ、「顔の見える連携」に大変良い機会となりました。さらに医療連携に努力してまいりますので、今後ともご指導賜りますようにお願い申し上げます。

次回、第8回医療連携フォーラムは10月頃に、2名の医師が新たに加わり充実しているリウマチ膠原病アレルギー科を予定しております。新任医師の紹介を含めた企画をしたいと考えております。

詳細は決まり次第ご案内させて頂きますので、よろしくお願いいたします。

糖尿病講座のご案内

当院では、2ヶ月に1回糖尿病講座を開催しています。
参加費は無料ですので、是非ご参加ください。
なお、参加人数に制限がありますので、事前に予約をお願いいたします。

お申し込み・
お問い合わせは、
内科外来まで

7月の講座

日　時　7月27日(金)　14:00～16:00
場　所　当院8階講堂
テーマ　糖尿病性眼症、糖尿病性腎症、
薬物療法入門

9月の講座

日　時　9月28日(金)　14:00～16:00
場　所　当院8階講堂
テーマ　糖尿病と歯周病、歯の手入れ、
外食の上手な摂りかた、患者交流会

お知らせ

「済生会だより　ならしの」が
No11(2009年夏号)より病院ホームページからご覧になれます。

発　行／千葉県済生会習志野病院
〒275-8580 千葉県習志野市泉町1-1-1　TEL 047-473-1281（代）　FAX 047-478-6601
ホームページ　http://www.chiba-saiseikai.com